

さざなみ

須崎市教育研究所 発行
第13号 令和6年12月23日

学級経営

「複線型の授業」とはよく耳にするようになりましたが、あのような授業は教師の教材研究と準備、学習者の主体的な学びによって成り立っています。子どもたちが主体的に学ぶ環境づくりは担任・授業者の大きな役割の1つではないでしょうか。そこで今回は、先生方が実際に学級で行っている学級での工夫の中から、心理的安全性に繋がりそうなものを一部紹介したいと思います。

○「聴き方」の指導

話す人を大事にする聴き方を指導されているということでした。手を止めて、話している人の方に体を向ける、相槌を打つという形の指導から始まりますが、これによって、話す側にとって話しやすい雰囲気をつくることができます。子どもたちの聴き方が良くなったときにはその様子を承認（価値づけ）することも大切です。良い行動が見られたら、全体の動きを止めてでも承認する、という先生もいらっしゃいました。



この指導を通すためには、先生自身も人を大事にする聴き方を実践している必要があると思います。受容と共感を意識して子どもたちの意見や主張は最後まで聴く、という先生もいらっしゃいます。何でも言いあえる「話しやすさ」の端緒となる指導だと感じました。

○「人を大切にする」具体的な行動の指導

「人を大切にしましょう」と言っても、人を大切にするとはいかに振舞うことかという認識は人によって違いがあるかもしれません。指導としては、具体的にどのようにするのがふさわしいかを伝えているようでした。聴き方の指導も、これに含まれるかもしれません。以下は指導の例です。



- ・班机にするときは欠席している仲間の机も一緒に動かす
- ・欠席している仲間の机を物置にしない
- ・困っている仲間に声をかける
- ・相手の立場で考えられえようにする など

これについても、言いつばなしではなく良い行動があれば全体に返して価値づけをすることを意識しているということでした。人を大切に意識の醸成は、心理的安全性の4つの要素すべてにかかわることだと思います。しかし、人を大切にしようとするあまり、思ったことが言えない雰囲気になってしまうのは、心理的安全性が保障されている集団（建設的な意見の対立がある集団）とは真逆なので注意が必要でしょう。

○趣意説明

ルールを決めたり指示をしたりするときに、「なぜそのルールが必要なのか」「何のためにそれをするのか」を児童生徒に説明する。児童生徒を1人の人間として尊重するのであれば、相手が納得できるように説明するのは当然のことだと思います。

○叱責ではなく対話

「何で呼ばれたと思う？」と投げかけることから指導を始めることで、児童生徒本人が自分の振る舞

いや言動を客観的に振り返ることを促す。また、「どうしてやってしまった？」と本人の気持ちを聞き出して受容することも本人が自分の気持ちと行動を振り返ることに繋げられる。

○友達の様子や言動を写真で紹介

子どもたちの様子を写真に収め、価値づける言葉を添えて学級に掲示する。特に伸ばしたい、増やしたい行動や言動を意図的に取り上げることで強化する。

○「間違い（失敗）がクラスを成長させていく」という価値観の共有

間違いや失敗をポジティブに考えるように促す。間違いや失敗という「結果」として捉えるのではなく「成長」の過程として捉える感覚を共有する。

細かいものを取り上げれば他にもたくさんありましたが、「丁寧な対話」と「行動や言動の価値づけ」が共通していると感じました。今回ご協力いただいた先生方、お忙しい中ありがとうございました。

三小交流事業

12月13日（金）に須崎中学校区の三小（安和小学校・新荘小学校・須崎小学校）の6年生を対象に交流事業を実施しました。私は、今回仲間づくりの活動の企画を行いました。

① 仲間さがし

背中にマークをぶら下げた子どもたちは、同じマーク同士で集まってグループを作ります。ただし、喋ってはいけません。これにより活動に参加するハードルが下がるのと、早く話したい、という気持ちを高めることもできると思います。

新荘小学校の児童が須崎小学校と安和小学校の児童のマークが同じであるとジェスチャーで伝えてあげるなど、素敵な光景を見ることができました。



② 共通点見つけ

グループができたら自己紹介をします。その後、グループごとに「目に見えない共通点」を見つける活動をしました。この活動のねらいは、共通点を見つけるために自分のことを次々に開示することにあります。なので、意見を出し合った結果共通点がなくてもよく、を見つけるために自分のことをオープンにしたことを価値づけします。

③ ひらめき体験教室

みんなで協力してひらめき力が試される「ナゾ」を解き進めます。コロンブスの卵のようなもので、閃いてしまえば何のことはない問題なのですが、子どもたちは頭を悩ませていました。どのグループもナゾを解ききることはできませんでしたが、今回はノーヒントで、学校関係なく頭を突き合わせて考えたということに意味があったと考えます。世の中は簡単に答えの出ない問題であふれています。これからそんな問題に直面したときも、仲間と協力して取り組んでもらいたいです。

